



心の声を聴く

ホームケアクリニック札幌 北海道札幌市

家で過ごす貴重なひとときの 安心と安全をサポートする

在宅ホスピスを希望する人が増える中、それを支援する体制はまだ整っていないとはいえません。在宅療養支援診療所であるホームケアクリニック札幌は、そんな人々の希望をかなえるために開設されました。その支援の様子とスタッフの思いに触れてきました。



前野宏 院長



田中ひとみ 看護部長
(緩和ケア認定看護師)



提箸秀典 MSW

在宅ホスピスに
特化したクリニック

緩和ケアや在宅医療など終末期医療に取り組んできた札幌南青洲病院では、2008年7月に在宅医療部門を独立させて、在宅療養支援診療所「ホームケアクリニック札幌」(無床)を開設しました。院長に就任した札幌南青洲病院前院長の前野宏医師が中心となり設立されたもので、このように在宅ホスピスに特化したクリニックは道内初はもちろん、全国でもまだまだ数が少ないことから注目が集まっています。

「在宅医療の中心的役割を担う在宅療養支援診療所は、06年に厚生労働省により新設されましたが、多くの診療所は1人の医師が外来診療も行いながら運営しています。そのような体制で365日24時間緊急時に対応するため、医師やスタッフが疲弊するのは明白です。やはり在宅診療は専門で行うべきであると考え、さらに当クリニックは札幌南青洲病院の基本理念である『ホスピスのことを大切にしている病院』を在宅の場でも実践しようと、在宅ホスピスに特化したのです」(前野院長)

同クリニックでは、終末期を迎えた患者さんを対象に、医師と看護師が定期的にご自宅を訪問し、そのケアにあたります。診療科は内科・緩和ケア内科で、基本的に

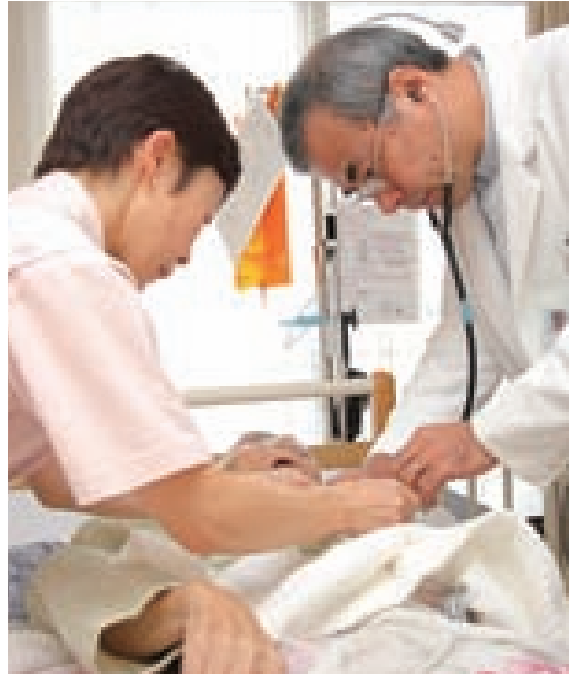
は月～金曜日の訪問診療(訪問看護)になります。しかし、緊急時対応は365日24時間。緊急入院が必要な場合は、ホスピス(緩和ケア)病棟を併設する札幌南青洲病院が受け入れを行っており、在宅支援のための万全の態勢が確保されています。また、自宅だけでなく施設での看取りもサポートしています。

スタッフは、前野院長、田中ひとみ師長をはじめ緩和ケアや訪問看護に長年携わってきた看護師3名、そして提箸秀典MSW(医療ソーシャルワーカー)。決して多いとはいえませんが、全スタッフがフル稼働で毎日頑張っています。在宅と病院を結ぶ調整役として活躍する提箸MSWは次のように話します。

「現在は、訪問診療を行っている約30名の患者さんのうち、十数名が緩和ケアを受けています。在宅



患者さん宅には緊急連絡先の表示を準備



医師と看護師ほか多くのスタッフによって支えられるのが在宅ホスピス

での看取りは月に数名ほど（08年12月は6名）。短い方では数日間と、私たちが患者さんとかかわる期間

は限られています。その中で、終末期の患者さんは体調も気持ちも刻々と変化します。ですから、緩和ケアや療養の場の選択、環境の整備など、その方のご希望に沿うにはスピードと柔軟な対応が不可欠なのです。それはご家族に対しても同様です」

その朝、札幌南青洲病院の入院患者さんが「どうしても家へ帰りたい」と急に訴えたため、病院とクリニック間でさまざま調整を行い、当日中に在宅療養に移行したというケースもあるといえます。その人は無事帰宅した2、3日後に亡くなりましたが、ご家族も患者さんの希望がかなったことで「満

足りく看取りができた」と喜んでいました。

地域との連携を深めて

患者さんとご家族の支えに

クリニックの朝は、スタッフ全員でのチームミーティングから始まります。そこで担当患者さんの様子を報告したり、診療内容について検討し、情報を共有します。ミーティングが終了すると、前野院長や看護師らは一斉に訪問先へと向かいます。

取材当日に訪問したのは、末期がんの男性のお宅。地域の総合病院から自宅へ戻られたばかりです。ここ数日間病態が悪化し、毎日の訪問を行っています。その日の朝も緊急の電話で対応となりました

が、辛い男性の状態は持ち直し、精神状態も安定したようで、その表情には笑顔も戻りました。

「緩和ケア病棟に勤務していたころ、症状コントロールがうまくいき穏やかに過ごしていた患者さんでさえも、自宅に戻ると病棟にいたときには見ることもなかった素敵な表情が見られるのに気づきました。そこから『家』というものが人にとって特別なものなんだとあらためて学びました。それだけに、家へ戻りたい、家で過ごしたいと希望する患者さんやご家族の思いに寄り添って、最良のケアをチームで連携しながら提供したいと考えています」

当日訪問を行った田中看護師長は、その道のりでのように話してくれました。

クリニックでは周辺病院との連携も緊密で、先の患者さんも他院からの依頼でした。依頼があると、前野院長をはじめクリニックのスタッフは退院前にその病院へ赴き、主治医や担当看護師らとカンファ



患者さんの病態に合わせたきめ細かなケアが求められる在宅ホスピス

レンスを実施。在宅へどのようにシフトしていくのかを確認しています。病院から在宅へとチームレス（継ぎ目なく）に移行するには、直接話し合うのが近道であり、そこには入院中の患者さんやご家族とも顔合わせできる利点もあるといえます。

「患者さんが家で過ごす時間は長いとはいえないかもしれませんが、でもたとえわずかな時間であったとしても、庭の木を眺めたり、孫に『お帰り』と声をかけたりといった日々のささやかな喜びが、『生きていく』と感じることにつながる。そんな患者さんの残された人生を後押しするため、これからも安全で安心できる医療や看護を在宅でも提供し、患者さんやご家族を少しでも支えることができればと思っています」（田中看護師長）

同クリニックは開設からまだ半年を過ぎたばかりですが、手応えは十分。今後はさらなる展開を計画中だといえます。

「在宅で過ごしている末期がんや重症の患者さんを対象に、『デイホスピス』を開きたいと考えています。介護者が不在であったり、不足しているため在宅療養をあきらめている方は少なくありません。そんな方のために、日中にご家族が介護できない場合でも、患者さんやご家族が安心して在宅を選択できるようサポートできればいいですね」（前野院長）

在宅への移行が加速する医療の現実のなかにあって、「家で最期を迎える」という選択肢を確実なものにするためにも、今後の取り組みが注目される同クリニック。在宅ホスピスを支える先導者として、地域だけでなく、道内そして全国をも引っ張る存在になることに期待せずにはられません。



朝のミーティングではさまざまな情報が交換される